

貸し切り列車で感じた 鉄道の魅力と可能性

今回は、鉄道の歴史に触れる機会として、また鉄道を広く学ぶための取り組みの一環として当社が実施した貸し切り列車を通じて、私が改めて感じた鉄道の新たな魅力とその可能性についてご紹介いたします。

私は、2012年に株式会社ナジコ(当時、株式会社中村自工)に入社し、現在13年目を迎えました。鉄道業界でのキャリアはまだ短い方ですが、「遠足前症候群」を発症する程度には、鉄道の仕事にやりがいと楽しさを感じています。

鉄道業界に入る以前の私にとって、鉄道は決まったルートを通学・通勤するための手段でしかありませんでした。私の出身地である福岡県は車社会のため、移動手段は専ら自動車でした。子どもの頃は、両親が運転する車か路線バスを利用し、鉄道を利用することはほとんどありませんでした。

しかし、今回、寄稿の機会をいただき、振り返ってみると、実は生まれた時から鉄道が身近にあるのが当たり前だったことを思い出しました。

私が子どもの頃に住んでいた家は、道路を

挟んで目の前に九州旅客鉄道の久大本線がありました。自宅の窓からは気動車が走る姿が見え、踏切警報音が日常的に聞こえる環境で、鉄道をいつも身近に感じていました。そのため、車両の走行音や踏切警報音は、私にとって自宅にいる安心感を与えてくれる温かい音でもありました。

また、最寄り駅は相対式ホーム2面2線を持つ地上駅で、互いのホームは跨線橋で連絡しています。当時、跨線橋からは筑後川花火大会の花火を見ることができたため、会場まで行けなかった年には母と一緒に駅の跨線橋に行った記憶があります(おそらく、入場券を購入していたのだと思います)。



子どもの頃に花火を見た跨線橋

思えば、子どもの頃から鉄道が身近にあるのが当たり前のことでしたが、鉄道業界に入るまではその存在を意識していなかったのです。毎日目にしていた車両が「電車」ではなく「気動車」だったという事実を知ったのも、鉄道業界に入ってからでした。鉄道業界で働き始めてから13年が経ちますが、日常業務では気動車の床下機器部品などに関する知識



株式会社ナジコ
モビリティソリューション事業部
営業部 営業企画課
課長

なかしま あや
中島 彩

を深めてきた一方で、鉄道についてはまだまだ学ぶべきことが多いと感じています。

当社は2024年に創業95周年を迎えました。鉄道車両部品の納入業者として長く鉄道業界に関わり続けてきましたが、鉄道の世界は非常に奥深く、95年の歴史があっても十分に理解し尽くすには、まだまだ学び続ける必要があります。さらに、社内には鉄道事業に直接携わっていない社員も少なくありません。そのため、社員一人ひとりが鉄道に関する知識を深める機会を増やすことが、今後のさらなる成長と社会への貢献につながると考えています。こうした考えのもと、鉄道の面白さや可能性を探求し、鉄道を学ぶ場として2024年8月に貸し切り列車を運行する取り組みを実施しました。



貸し切り運行したE257系

今回の貸し切り列車は、鉄道の歴史を学ぶことができる群馬県安中市の「碓氷峠鉄道文化むら」を目的地にしました。目的地が決まると、上野駅の出発希望時間や目的地での昼食、見学に要する滞在時間、帰路の到着時刻など、私たちの要望を満たすためのキャッチボールを繰り返しながら行程が組み立てられることを学びました。実際には、車両をお借りしたJR東日本グループの皆さまがこのような実作業を行っているのですが、私たちが一編成の列車を貸し切り、運行するためには

多くの鉄道事業者の皆さまが関わっていることを実感しました。

【運行概要】

運行日：2024年8月24日(土)

車 両：E257系 5両編成(定員298名)

2人掛け回転式クロスシート2列

往 路：9時14分上野発11時33分横川着

復 路：15時31分横川発17時47分上野着

※途中、大宮駅でも乗降



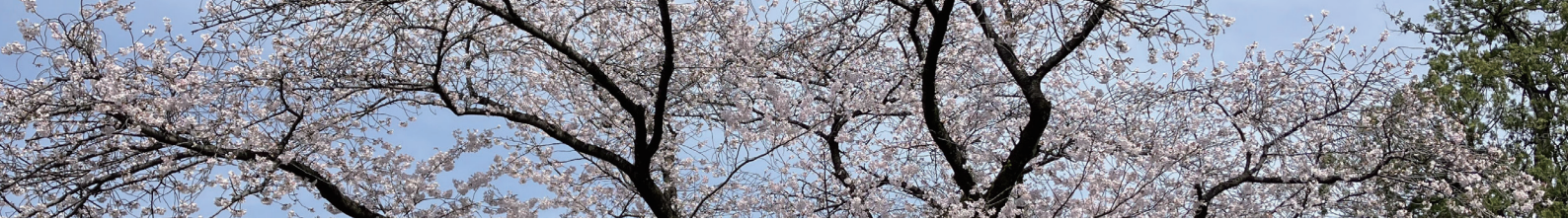
大宮駅の発車案内板(往路)

実施が当社の95周年と重なったため、周年記念イベントとして鉄道を学ぶ目的に加えて、社員とその家族向けの懇親イベント「ナジコファミリー号」としての運行となりました。当日は、グループ会社を含む社員とその家族、乳幼児から大人までの幅広い世代の総勢107名が参加しました。

横川駅までの道中、車内でも鉄道の歴史や面白さに触れる機会が多くありました。

まず、大宮駅を発車した後に流れてきた旧国鉄時代のオルゴール音源『鉄道唱歌』です。現在では、車内チャイムは電子音によるものが主流のため、どこか温かみのあるオルゴールの音色からは時代の変化と共に変わってきた車内チャイムの歴史を感じました。

子どもたち向けには、車掌アナウンス体験や駅長制服撮影会などを行い、鉄道を五感で感じて楽しんでもらえる工夫を行いました。車掌アナウンス体験では、子どもたちは緊張した表情を浮かべていましたが、滅多にない機会に満足している様子が伺えました。列車が進むにつれ、5両編成の車両を先頭から最



後尾まで元気いっぱい走り回る子どもたちの姿も見られ、楽しさが車内全体に広がっていくようでした。これもまた、貸し切り列車ならではの光景でした。

多くの人々とともに移動しながら旅情を楽しむ——こうした空間や時間を共有できるのは、鉄道の旅ならではの醍醐味だと改めて感じます。



当日の子どもたちの様子

ここで、参加した当社社員から寄せられた感想をご紹介します。

Tさん「妻と3歳の息子、1歳の娘の家族4人で参加しました。3歳の息子はTVアニメ『シンカリオン』に夢中で鉄道が大好きな時期のため大興奮でした。貸し切りということもあり、運転士さんや車掌さんを見るために先頭車と後尾車を駆け回っていました。緊張して上手に話すことはできませんでしたが、車内放送を体験できてとても満足していました。帰宅後には妻から「楽しかった」と言われ、私も大満足のイベントでした。」

Oさん「夫、3歳の長男、1歳の次男とともに参加しました。子どもたちはそれぞれ1席を占領して外を眺めたり、車内を散策したりと、飽きることなく楽しんでいました。車内では皆さんに構っていただき、次男もずっとニコニコでした。長男は車内アナウンス体験にも挑戦しました。普段から家で車掌さんの真似をしているので、大興奮でした。帰宅後も『次はいつナジコ(ファミリー)号乗れるのかな。楽しかったね。』と言ってきます。子どもたちはさらに鉄道が好きになり、最近では自家用車の移動を嫌がって鉄道を推してくるようになりました。我が家の素敵な夏の思い出となりました。」

時代の変化とともに、子どもたちがのびのびと遊べる場所や、大人が安心して子どもを遊ばせることができる場所は減ってきたように思います。イベント列車の中には、子どもが遊べるスペースを設けている車両があるように、鉄道にはそういった場の提供としての可能性があることを体感しました。

車内でのひと時を満喫した後、横川駅に到着したのはお昼過ぎでした。横川駅といえば、荻野屋の「峠の釜めし」です。「温かいお弁当が食べたい」という旅行者の声を反映し、



荻野屋の「峠の釜めし」

1958年に発売されたのが益子焼の釜に入った現在の形です。当時の駅弁の常識であった冷たい状態で提供を覆し、画期的な駅弁として人気を博したそうです。

駅弁も鉄道と共に発展・進化しており、駅弁という異なる側面からも鉄道の歴史を感じることができました。

そして、今回の旅の目的地である「碓氷峠鉄道文化むら」では、鉄道の魅力と歴史を深く学ぶことができました。

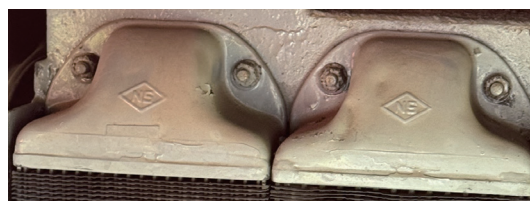
鉄道資料館では、碓氷峠の鉄道史や技術的挑戦についての展示が行われており、鉄道が地域社会や産業に果たしてきた重要な役割を改めて実感しました。また、急勾配で知られる碓氷峠を越えるために使用されたEF63形電気機関車の運転体験は、鉄道ファン必見のプログラムです。

屋外展示場には、多数の歴代車両が展示されており、当社製品を搭載したキハ20やキハ35もその中に含まれていました。



碓氷峠鉄道文化むら・屋外展示場

当時の車両そのままに残されており、「NS」のロゴマークが読み取れる状態の製品を目にした際には、その歴史の重みと、当社が長年にわたり鉄道に携わってきた責任の大きさを改めて感じました。話に聞くだけでなく、実際に現物を目の当たりにすることで、肌で感じるような緊張感がありました。



ラジエータの「NS」マーク

前述のとおり、当社には鉄道に関わらない社員もいるため、当社が取り扱う製品が実際に車両に搭載されている状態を見たことがない社員も多くいます。そういった社員にとって、自社製品がどのように搭載されているのかを実際に見て、学ぶことができる良い場となりました。同時に社員の家族にも、ナジコがどのような会社でこういった仕事をしているのかを改めて知ってもらう良い機会となりました。

当社では、鉄道車両部品事業における役割を「縁の下の力持ち」と表現することがあります。言葉のとおり、目立たないながらも床下で鉄道を支えているということ、碓氷峠鉄道文化むらを訪れたことで身をもって感じ、責任ある仕事に、より一層身が引き締まる思いがしました。

今回は、運行時間の都合もあり、訪れることはできませんでしたが、碓氷峠鉄道文化むらの周辺には、鉄道史において重要な遺産が多くあります。近代化遺産として日本で最初の国指定重要文化財に指定された碓氷第三橋梁(通称「めがね橋」)をはじめ、碓氷峠区間における電化を支えるために建設された旧丸山変電所、信越本線の横川－軽井沢間の鉄道



施設の橋梁やトンネル、関連する建造物が「碓氷峠鉄道施設」として指定されています。これらの施設は、碓氷峠エリアの急勾配を克服するための技術的挑戦を物語る貴重な遺産として評価されています。

今回、運行記念としてオリジナルヘッドマークを作成し、碓氷峠鉄道文化むらのEF63形電気機関車に掲出いただきました。



ナジコヘッドマーク

鉄道は、こういったオリジナリティを出すことができ、アイデア次第で様々な楽しみ方ができます。既に各鉄道事業者様が取り組まれています。貸し切り列車は、今回のようなイベントに限らず、会議や講習会、パーティや結婚式など様々な目的で運行することができます。当社も鉄道を学ぶための勉強会

を開催していますが、会議室で行うよりも鉄道の面白さや魅力に引き込まれるかもしれません。

この旅を通して、改めて鉄道は単なる移動手段ではなく、特別な体験が出来る場であることを感じました。鉄道には、人と人を結び役割、地域社会との結びつきを強める力、感動を生む特別な体験の提供など多くの可能性があります。その可能性を最大限に引き出すためには、私自身が鉄道をもっと知り、鉄道の持つ魅力や役割を理解することが必要です。そして、目の前の業務に限らず、鉄道業界全体に寄与できるように取り組み、鉄道を次世代へ引き継ぐ努力を続けなければなりません。同時に、鉄道の未来を担う若い世代がその魅力に触れ、関心を抱く機会を増やしていくことが重要です。いつの日か、今回の貸し切り列車の旅に参加した子どもたちが大人になった時、「鉄道は面白かった」とこの日のことを思い出し、鉄道を担う人材になってくれればと思います。

最後に、貸し切り列車を運行するためには、ダイヤの調整や車両・乗務員の手配などを行っています。楽しい旅の裏側には、安全で安心な運行を実現するための、さまざまな人々の努力と協力があります。鉄道において最優先されるのは「安全」ですが、日本の鉄道が各社のたゆまぬ努力によって毎日安全に運行されている一方で、「安全に対して改善し続けない状態」は、時として危険が潜んでいることを見落としてしまう可能性もあります。安全は当たり前には存在するものではなく、作り上げていくものだという意識を常に持ち、メーカーであり商社でもある鉄道車両部品事業者としてこの意識を胸に刻み、より一層身を引き締めて日々の業務に取り組んで参ります。